

第34回
西洋社会科学古典資料講習会

2014年11月12日（水）～14日（金）

一橋大学社会科学古典資料センター

講 義 日 程

第1日 11月12日(水)

	8:40～ 9:00	オリエンテーション		
①	9:00～10:30	書誌学(Ⅰ) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	1
②	10:45～12:15	書誌学(Ⅰ) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	
③	13:35～15:05	古典研究(Ⅰ) 機械の問題と経済学：イギリス古典派経済学とその周辺	石井 穰 関東学院大学経済学 部准教授	6
④	15:20～16:50	古典研究(Ⅱ) ルソーとモンテスキュー	山崎 耕一 一橋大学社会科学古典 資料センター特任教授	9

懇親会 (17:30-19:30)：希望者のみ

第2日 11月13日(木)

- | | | | | |
|---|-------------|---------------------------------------|-------------------------------|----|
| ① | 9:00～10:30 | 保存・修復（Ⅰ）
紙資料の保存 | 増田 勝彦
昭和女子大学光葉博
物館顧問 | 12 |
| ② | 10:45～12:15 | 資料展示論
書物の展示：「見せる方法」と「魅せる工夫」 | 岡崎 礼奈
東洋文庫普及展示部
研究員・学芸員 | 16 |
| ③ | 13:35～15:05 | 保存・修復（Ⅱ）
西洋古典資料の修復について | 岡本 幸治
製本家・書籍修復家 | 21 |
| ④ | 15:20～16:50 | 一橋大学社会科学古典資料センター見学 | | |

第3日 11月14日(金)

一橋大学附属図書館見学 (9:00～ 9:45)：希望者のみ

- | | | | | |
|---|-------------|--|----------------------------------|----|
| ① | 10:00～11:30 | 書誌学（Ⅱ）
西洋古典資料の目録作成 | 床井 啓太郎
一橋大学社会科学古
典資料センター助手 | 24 |
| ② | 12:50～14:20 | 書誌学（Ⅲ）
目録作成実習 | 福島 知己
一橋大学社会科学古
典資料センター助手 | |
| ③ | 14:35～16:05 | 古典研究（Ⅲ）
文献考証と経済思想：「ユダヤ人」の歴史をめぐって | 恒木 健太郎
専修大学経済学部講
師 | 29 |
| | 16:20～16:40 | 修了式 | | |

※第3日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

記述書誌を“読む”面白さ

— 図書館員のための書誌学入門 —

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットでも本文を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios.* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存するものの 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」とし

ての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。

たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts*. (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011)において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性（たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など）を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。（読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。）この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約 30 年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』（1543）の初版と第 2 版約 600 冊の現物調査（とくに書き入れの調査）を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus* (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566). (Leiden: Brill, 2002)]。この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房 2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法は、数は少なくとも、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

現在のようなインターネット／デジタル時代に古典資料を扱う図書館員（古書籍業者を含む）にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文（テキスト）、製本、来歴(provenance)、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くことから、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列举（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」（山下浩）としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、

ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果（書誌類・論文など）を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。（図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。）

今回は、（書誌学の研究成果を活用するために必要な）書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅰ）：本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅱ）：記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅲ）：印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に上げる予定です。

「本の仕立て」（その本がどのような折り丁によって構成されているか）は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、（理想本について記録した）記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ① どんな本であるのか（著者、出版者、出版年など）
 - ② どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか（他のコピーとの関係）
 - ③ 完全なコピーであるのか（本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか）
- といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

* 図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本（ideal copy：市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本）の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わ

る記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との（交流や諍い・いざこざを含む）関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・高野彰『洋書の話』増補版（丸善 1995）

記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS) のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/> から無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

- ・*Marks in Books*. (Cambridge, MA : Houghton Library, Harvard Univ., 1985) Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかもしれません。
- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers (ILAB) のサイト http://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。（ダウンロードして損はありません。）

本書（第六版）の邦訳：『西洋書誌学入門』（図書出版社 1994）（ビブリオフィル叢書）

- ・安形麻理『デジタル書物学事始め』（勉誠出版 2010）

最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知るうえで有用な本です。樫村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法：HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』（慶應義塾大学出版会 2010）も参考になります。

- ・ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本：羊皮紙から甦った天才数学者』（光文社 2008）も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- ・書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids !」<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid> に「泰西古典資料リンク」のページがあります。

○暫定版

著者名	Copernicus		Shakespeare	William Morris
書名	<i>De Revolutionibus</i>		<i>First Folio</i>	<i>Kelmscott Chaucer</i>
出版地	Nuremberg	Basel	London	London
出版年	1543	1566	1623	1896
調査部数	278	323	218/224	292/296
Europe			1	
Austria	3	5		
Belgium	5	2		
Croatia		2		
Czech Republic	3	7		
Denmark	3	2		2
Estonia		1		
France	33	28	1	3
Germany	47	29	3	7
Greece		2		
Hungary	2	1		
Ireland	1	3	1	1
Vatican City	3	3		
Italy	18	44	1	
Lithuania	1			
Netherlands	5	2		3
Poland	16	37		
Portugal	3	3		
Romania		1		
Russia	8	8		
Slovakia		1		
Spain	9	10		
Sweden	5	6		
Switzerland	7	9	1	1
Ukraine	2	3		
U.K.	42	46	44+1(stolen)	60
Canada	1	3	1	6
Mexico	1			1
U.S.A.	52	60	145	172
Australia		2	1	5
China		1		
Japan	7	2	15	26
New Zealand			1	1
Philippines	1			
South Korea				1
South Africa			1	3
?			1	

【出典】

Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus* (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566).

(Leiden: Brill, 2002)

Rasmussen, Eric and A. J. West, ed. *The Shakespeare First Folio: A Descriptive Catalogue*. (Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2012)

Peterson, William S. and S. H. Peterson. *The Kelmscott Chaucer: A Census*. (New Castle, DE: Oak Knoll Press, 2011)

機械の問題と経済学

— イギリス古典派経済学とその周辺 —

石井 穰

(関東学院大学経済学部准教授)

本講義では、イギリス古典派経済学の中心的人物であったリカードウ (David Ricardo 1772-1823) による、機械導入の影響に関する立場変更がなぜ衝撃的とされたのか、その理由について考えます。この要約では、その道筋について簡単にご説明したいと思いますが、その前に古典派経済学および機械の問題についてのあらましを述べておきます。

イギリス古典派経済学とは、一般にアダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) から J. S. ミル (John Stuart Mill 1806-1873) にいたるまで、当時のイギリスを中心に展開された経済学を指しています。諸説ありますが、経済学の歴史はおおよそ 200 年といわれていて、この古典派経済学によって初めて、体系的な学問としての経済学が打ち立てられたとされています。ただし当時の経済学は法学や政治学などの社会科学上の隣接分野と完全に独立していた訳ではなく、その呼び名もポリティカル・エコノミー (Political Economy) となっていました。いわゆるエコノミクス (Economics) という言葉が確立されたのは、経済学がその他の社会科学から切り離されてゆく 19 世紀末のことです。

イギリス古典派経済学というと、アダム・スミスの重商主義批判やリカードウの比較生産費説など、自由貿易のイメージが強いかもしれませんが。穀物法廃止をはじめ、イギリス古典派経済学が自由貿易を一つの大きなテーマとしていたことは確かですが、それ以外にもさまざまな問題が取り扱われています。イギリスは今から 240 年ほど前、世界に先駆けて産業革命を成し遂げた地域として知られています。産業革命というと蒸気機関などテクノロジーの飛躍的進歩と同時に、経済や社会のあり方が大きく変わった歴史的イベントでもありました。鉄鋼業の進歩、綿紡績や綿織物などにおける新たな機械の発明と導入、工場制機械工業の発展を契機に、生産や消費のあり方、そして労使関係は大きく変化しました。

本講習のテーマとなっている「機械の問題」とは、機械による生産の導入が、社会にどのような影響を及ぼすかを取り扱ったものです。機械による生産は従来に比べ生産性を飛躍的に高め、社会を物質的に豊かにします。しかしその一方で、従来の人手による生産から機械による生産に移行した結果、多くの人々が職を失

う可能性もまたあるのではないかと指摘されるようになりました。機械による失業については、当事者である労働者がいち早く反応を示し、かなり暴力的ではありましたが、ラダイト運動（おもに 1810 年代）がわき起こりました。そのような社会的事件もあって、古典派経済学の時代、機械の導入は労働者をも含む社会全体の利益となるのか、それとも失業を生み出すことで労働者には有害な作用をもたらすのか、という点を巡って議論が交わされました。

ところで、この機械の問題については、ひときわ注目を集めるトピックがあります。それは、19 世紀はじめイギリス古典派経済学の中心的人物となったリカードウが、機械についての立場を変更したことです。リカードウはもともと、機械の導入は社会全般の利益との立場をとっていましたが、その後、労働者に不利益をもたらす可能性があるということを表明するようになります。リカードウが主要人物の一人であっただけに、同時代的な影響も大きかったわけですが、経済学の歴史においても少なからぬ意味を持っています。

たとえば、『資本論』で有名なマルクス（Karl Marx 1818-1883）は、資本蓄積と生産力の発展が労働者階級に及ぼす影響を考察した際、リカードウの考察を高く評価しています。また 1930 年代からケンブリッジにて『リカードウ全集』を編集したスラッフア（Piero Sraffa 1898-1983）もまた、全集序文において、機械の問題が取り扱われた部分に言及した際、リカードウによる立場変更を「革新的変更（revolutionary change）」と表現して、高く評価しています。その一方で同時代のマカロック（John Ramsay McCulloch 1789-1864）のほか、後に新古典派と呼ばれる経済学の系譜に属する人々、たとえばヴィクセル（Knut Wicksell 1851-1926）、森島通夫（1923-2004）らは、リカードウの立場変更を自由市場のもとでの資源の効率的利用の想定に反するとして批判しています。

リカードウの見解に賛成するか反対するかは別として、いずれにせよ、この立場変更は経済学の歴史において、ある意味衝撃的であったといえます。そこで本講義では、なぜこの立場変更が衝撃的であったのか、経済理論の観点から読み解いていきたいと思います。リカードウの考察の意味を知るだけでなく、機械の問題の基礎にある、古典派経済学（ひいては新古典派経済学）の基本的な枠組みを垣間見ることができるでしょう。

説明にあたって、まず古典派経済学の基本的枠組みとは何か、本講習の説明に必要な限りでお話します。そのうえでまずは、アダム・スミスによる機械の影響を検討します。次に産業革命のなかで 19 世紀前半に提示されたアダム・スミスへの批判として、バートン（John Barton 1789-1952）、シスモンディ（Simonde de Sismondi 1773-1842）の見解にふれます。同時に、バートンやシスモンディへの反論を試み、機械導入の全般的利益を主張する議論として、マルサス（Thomas Robert Malthus 1766-1834）およびマカロックの考察を検討します。最後にリカ

ードウによる立場変更の概要とその意味を考えます。

以下ご説明する内容について、簡単に述べておきます。古典派経済学の基本的な枠組みについては、立場により評価が分かれる所もありますが、一つは富裕の一般化が挙げられます。これは労働の生産力が発展し、社会が豊かになればその恩恵は社会の隅々にまで行き渡るというものです。もう一つは販路説もしくはセイ（Jean Baptiste Say 1767-1832）の法則として知られるものです。簡単にいえば、人間の欲望の無限性を想定し、供給はみずからその需要（販路）を作り出すというものです。機械の問題はこの基本的枠組みをゆるがすものでもありましたので、リカードウの立場変更は反論に遭ったわけです。

アダム・スミスの生きた時代は産業革命前夜であり、機械はまだ複雑な機構をもった道具としての位置づけにありました。アダム・スミスは機械により生産性が上がれば、それまで用いられていた資源の一部が解放され、新たに生産に用いられることで社会全体を豊かにすると見ていました。しかし産業革命が進展していきますと、バートンやシスモンディらは機械による失業をつきつけ、富裕の一般化に異議を申し立てます。この異議に対しては、まずマルサスは生産物価格が低下し需要が拡大すれば、生産および雇用もまた拡大すると論じます。それをさらに突き詰め、機械導入はいかなる場合においても社会全般の利益と主張したのがマカロックです。この想定の後には、生産の拡大に際して需要面での困難はないという販路説、さらに自由市場は資源の完全利用を達成するという見通しがあります。そのような議論の対立のなかで、リカードウの考察が持った意味についてですが、残念ながら要約には入り切りませんので、当日またご説明したいと思います。

ルソーとモンテスキュー

山崎 耕一

(一橋大学社会科学古典資料センター特任教授)

例えばアメリカで「1%の富裕者と99%の貧民」の格差が指摘されたり、「ウォールストリートを占拠せよ」というスローガンのもとでの民衆運動があったことは御存じだと思います。日本でも勤労者の雇用と生活、さらには生命すら脅かすブラック企業が批判されています。これらの背景には、個人の活動、とりわけ経済活動の自由を絶対視し、法に触れさえしなければ何をやっても（＝他者に極端な不利益を与えても）構わないとする思想があるわけで、かつては労働者側の実質的な不利を修正するために認められていた労働基本権も、形式的な自由を脅かすものとして事実上骨抜きにされるようになってきています。

他方では、個人の自由を野放しに認めることから生じる不都合を規制するものとして「共和主義」が取り上げられ、日本でも話題になっています¹。「共和国」ないし「共和主義」の語は人や時代によって少しずつ異なる意味で用いられますが、ここでは国民もしくは市民が自分自身で自分たちの社会のルールを作る制度と理解しておいて構わないでしょう。ルール作りに積極的に参加して、ルール＝法に自分たちの意思を反映させることが自由なのであり、場合によっては、この後者の自由の名のもとに、経済活動に一定の制約を加えることもあり得るわけです。そうすると、こちらの自由を実現すれば最初に掲げた問題は解決されそうに見えます。しかし一つの問題に関して複数の意見があり、どんなに話し合っても意見が一致しない時にはどうすればいいのでしょうか。普通は多数決というルールが採用されますが、自分の意見が最終的に通らなかった人にとっても「皆で決めた法は、自分がこうしたいと思ったことなのだから、法に従うのが自由だ」と言えるのでしょうか。むしろ「抑圧」と感じられるのではないのでしょうか。また、もし「皆で決めたルールだから」という名目である一つの振る舞い方のみが日常生活の隅々にまで強制されたら、大変に息苦しい社会になるのではないのでしょうか。フランス革命の際にそのような事例が見られたことは最近紹介されていますし²、現在でも「人民を代表する党が国

¹ R. ドゥブレ、樋口陽一、三浦信孝、水林章『思想としての〈共和国〉』、みすず書房、2006年、樋口陽一『「共和国」フランスと私』、柘植書房新社、2007年、J. P. シュヴェヌマン、樋口陽一『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』、平凡社新書484、2009年など。

² 竹中幸史「理想の公教育への挑戦」、山崎耕一・松浦義弘編『フランス革命史の

家を正しく指導している」という大義名分のもとに、全体主義的で抑圧的な支配・統治が実行されている国を、私たちは知っています。それよりはまだ、各人がそれぞれに自分のやりたいことをやれる社会の方が、人々が生き生きと楽しく生活できるのではないのでしょうか。

そうしますと、国家または権力との関係で自由を考えた場合に、権力から干渉されずに各人がやりたいことをやれるのが自由だと考える立場と、ルール＝法の制定に積極的に参加して、自分自身の意思をルールに反映させる（その後は、自分たちで決めたルールに従う）のが自由だと考える立場の二つがあり、どちらもそれなりの合理性があるが、どちらも極端なまでに突きつめると色々な不都合が生じると言えそうです。

前置きが長くなりましたが、上に記したような現代社会における自由の問題を念頭におきながら、18世紀フランスの啓蒙思想家であるルソーとモンテスキューを講義で紹介したいと思います。「各人はそれぞれの私生活において自分のやりたいことをやる権利があり、国家も個人の私生活に干渉しないというのが自由である」という立場を示したのがモンテスキューであり、「自由とは自治である、すなわち政治権力に積極的に参加して、自分の意思を国家の意思とするのが自由である」という立場を示したのがルソーなのです。講義においては現代社会の問題は取りあえずカッコにくくって脇に置き、18世紀のフランスという時代的背景の中で二人の思想家がどのように生き、どのような思想を形成したかをお話しします。

モンテスキュー男爵であるシャルル＝ルイ・ド・スゴンダ（厳密に言えば、「モンテスキュー」は所領の地名であって、苗字ではありません。実際にはモンテスキューが彼の呼び名として通用していますが）は1689年1月18日にフランス南西部の都市ボルドーの郊外にあるラブレードの城館で生まれ、父親と伯父の双方から官職を引き継いで、ボルドー高等法院の院長になりました。当時のフランスでは裁判官などの官職は一種の私有財産で、相続や遺贈、さらには販売や譲渡ができたのです。モンテスキューは長男だったので家業を引き継いだわけですが、彼自身は裁判の実務にはあまり興味がなく、むしろ文学や歴史の研究に打ち込んでいます。付け加えますと、当時の官職は持ち主の社会的地位や権威を示すための名誉職という色彩が強くて、ここからは一家の生活を支えられるほどの収入は得られません。職業を経済的な収入源という意味で用いるなら、モンテスキューの職業はワイン製造・販売業でした。彼は歴史が移り変わるメカニズムに興味を抱き、それを解明するために視野を広げるべく、1728年からの3年間ヨーロッパ旅行に出ています。前半の1年半でオーストリア・イタリア・ドイツ・オランダを回り、後半の1年半はイギリスに滞在しました。1731年に帰国すると、考察の対象を古代ローマ一国に絞って、1733年に『ローマ盛衰原因論』を刊行します。さらに十数年の研鑽を経て、1748年には

古今東西のあらゆる国に考察の対象を広げた主著『法の精神』を世に問います。この後もさらに別の著作を準備していたようですが、なんだか『法の精神』の執筆でエネルギーを使い果たしてしまったような感じで、1755年の2月、滞在していたパリで風邪を引いたのが原因で亡くなっています。

モンテスキューの生涯は、3年間のヨーロッパ旅行を除けば、ボルドーでの研究生活とパリでの社交生活を交互に繰り返すだけで比較的単調であり、またその著書も、確かに『ペルシア人の手紙』（1721年）や『グニードの神殿』（1725年）のような文学作品もありますが、全体として見ると『法の精神』という代表作一つを完成させるために彼の人生のすべてが投入されたような印象を受けます。つまり彼は人生のすべてを一つのテーマの探求にかけて、その分野で超一流の成果を挙げたわけですし、その集中力と完成度の高さにおいて、モンテスキューは天才であったと言えるでしょう。それに較べますとジャン=ジャック・ルソー（1712年－1778年）の方は人生も波乱万丈で、彼の生涯を語るだけでも何時間もかかりそうですし、著作も文明論（『学問芸術論』『人間不平等起源論』など）、政治理論（『社会契約論』など）、教育論（『エミール』）、小説（『新エロイズ』など）、自伝（『告白』など）、さらには植物学や音楽関係など、多岐多様な分野にわたっています。しかもそれぞれの分野で第一級の重要な作品を残しているのですから、モンテスキューとはまったく別のタイプではありますが、こちらもまた天才であることは確かです。ただしルソーの業績のすべてを紹介することは、時間の関係からいっても、また私の能力からいっても到底不可能ですから、政治的な自由という問題に関係ある範囲に話を限ります。そうした関心からしますと、ルソーの代表作は『人間不平等起源論』と『社会契約論』および『告白』と『エミール』という二つのペアとすることができるようになります。つまり、現実に存在する不平等な社会はどのようにしてできたのかという問題を追究するのが『人間不平等起源論』であり、逆に「どのようにすれば平等で理想的な社会を作ることができるはずか」という問題を取り上げるのが『社会契約論』です。同様に J.-J. ルソーという実在の人間はどのように生きたのかを記すのが『告白』であり、どのような教育がほどこされれば理想的な人間を育成できるかを論じるのが『エミール』です。つまり『人間不平等起源論』と『社会契約論』は社会全体を、『告白』と『エミール』は個人を取り上げるという相違がありますが、これら二つのペアは対応しているのです。

以上を話の前提として、講義ではこれら二人の思想家の生涯と作品を紹介したいと思います。

紙資料の保存

増田勝彦

(昭和女子大学光葉博物館顧問)

1. 紙自身に内在する劣化要因

1-1. 碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移（本紙だけではなく周囲が茶褐色になる）

1-2. 酸性サイジング処理紙

*補足-1を参照

1-2-1. 酸性物質（明礬（カ明礬）、硫酸アルミニウムなど）

①セルロースを加水分解し、結晶化を促す

②紙への添加物として

②-1 明礬

②-2 硫酸アルミニウム：滲み止め用ロジンのパルプへの定着剤として添加

＜対策＞→酸性度の測定

湿式 中性紙チェックペン、pH メータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法の検討」

第28回文化財保存修復学会大会、2006

→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム（ CaCO_3 ），重炭酸マグネシウム（ MgHCO_3 ）

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学 32, pp. 78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学 32, pp. 70-77

* DAE 法によるトリエタノールアミンの残留処置

日本ファイリングによる事業化

1-2-2. 触媒（金属イオン）

①酸化反応を促進する（インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青）

＜対策＞フィチン酸塩処理の効果が認められる

②黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

1-3. 保存・修復材料

①セロテープ類による汚損・変形

＜対策＞→有機溶剤による除去

②漂白剤（漂白中、残留漂白剤による）

＜対策＞→外観の向上を図るだけの漂白を避ける

版画などでは光漂白（日光、蛍光灯）を処置することがある。

2. 環境に依存する劣化要因

2-1. 生物環境

虫害とカビ害（温度、湿度が高いと発生しやすい）が主だが、小動物による被害も可能性有り。

＜対策＞燻蒸、I P M

*補足－2を参照

2-1-1. 虫害

2-1-2. 黴害

（黴の生育範囲）

①褐色斑点(フォクシング)→乾性の黴

②黒色・赤色・青色の黴→湿性の黴

＜対策＞→保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

→普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

→防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2. 生物以外の環境

2-2-1. 温度と湿度

①温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

②含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

③温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

＜対策＞→書庫・収蔵庫の温度湿度管理

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

→木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

→相対湿度と絶対湿度を理解する。調湿剤の含水量。

2-2-2. 汚染空気

a) 環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用
汚染大気から

＜対策＞→収納箱によるシェルター カイルラッパー他

→「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会

→中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」

[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

アルカリ性紙と長期間密着接触すると酸性紙の変色が大きくなる可能性。

b) 環境材料から放出される物質による

b-1. 新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

近年。枯らし期間の短い桐材からも酸性物質が測定されている

＜対策＞→内装木材の場合、ハトロ紙、調湿紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2. アルカリ性物質

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

①染料を変色させる→浮世絵

②写真の乳剤に影響

③絹を劣化させる

④アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

＜対策＞→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

中性紙について

硫酸アルミニウム含有中性紙

中野修「中性紙の評価法とこれからの課題」資料保存協議会第1回セミナー(2000)

坪倉早智子他「挿入法による紙劣化試験(IV)-硫酸アルミニウム成分の紙の劣化への影響-」文化財保存修復学会誌 Vol.55、2010年3月

2-2-3. 紫外線その他の光

*補足-3を参照

a) 光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

①可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

＜対策＞→紫外線除去フィルターの使用

→光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200\text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100\text{日} = 80,000\text{Lux} / \text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

2-2-4. 用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

①書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

＜対策＞→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管、注意深く丁寧な取扱

②閲覧による紙の疲労

＜対策＞→調査・研究時だけの保護策

2-2-5. 災害

①水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

*火災時の消化水、

*台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ

*配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

＜対策＞→水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）

一度に処理できる量をあらかじめ調べておく

→急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。

その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を使用する時は解凍後吸い取り紙で徐々に乾燥させる

2-3.収蔵用材

2-3-1. 碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

＜対策＞→包装用紙製品は中性紙とする（袋、包装紙、箱の紙、板紙）

2-3-2. 新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

＜対策＞→内装木材の場合は、ハترون紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

→中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

2-3-3. アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

3. 劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財(書籍など)の寿命」

修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要はあるか。

・図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5

・IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.アドコック編、
国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

書物の展示

— 「見せる方法」と「魅せる工夫」 —

岡崎 礼奈

(東洋文庫 普及展示部 研究員・学芸員)

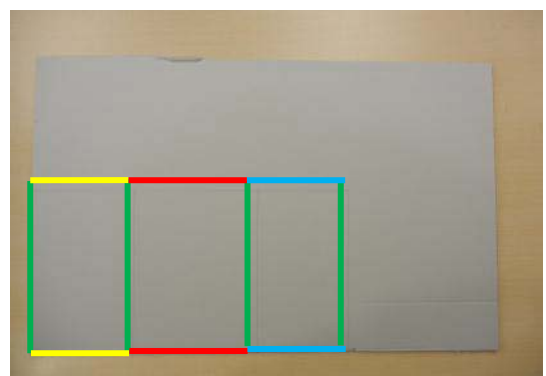
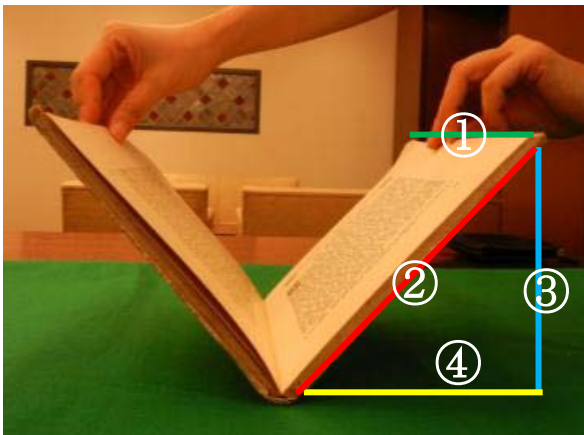
はじめに

近年、図書館施設においても「展示」という形で資料を公開し、より多くの方々に資料の価値や学びの楽しみ、最新の研究成果等を普及する機会が増えています。当然のことながら、機関により規模の大小は異なり、展示に対する目的や方法論も多様ですが、具体的な展示実践例は資料公開の可能性を検討していくうえでも有効な情報です。本講では、2011年10月に開設した「東洋文庫ミュージアム」での展示を例として、書物などの紙資料を中心とした展示の具体的な方法、観客に資料の魅力を伝えるための工夫について、現場での経験をもとにお話します。

1. 書物の展示方法

① 展示に必要な材料

各資料の形状・状態を注意深く観察し、それぞれの展示の可否やふさわしい方法を検討することが大前提ですが、破損や著しい劣化が生じている、あるいは特殊な形態であるなどとの例を除き、一般的な書籍の展示設営そのものに必要な材料は限定されます。展示ケースや照明の他に、工具、厚手の中性紙、アクリルテープ、スチレンボ



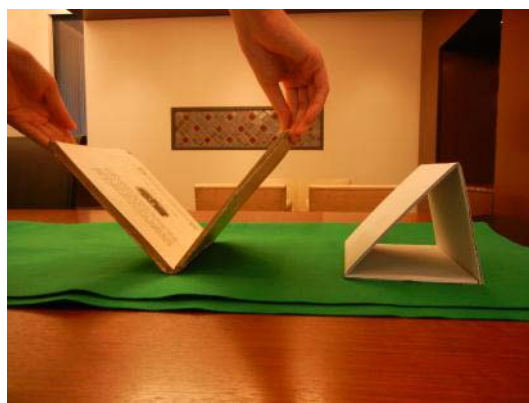
図② 支持具の展開図

(各辺の色は図①に対応しています)

ード（解説パネル用）があれば、ある程度の展示が可能です。

② 展示方法

ケース内に設置する前に、まず各資料の展示ページを開いてみましょう。無理な角度で開き、一定期間固定することは本の状態を著しく損ねる原因となります。本の綴じが弱くなる、あるいは背にダメージが生じるなどの負荷を与えない範囲で、どこまで開けば見やすいのかを見極めることが大切です。



図③完成した支持具

この角度まで開けるという位置が決まったら、図①のように本を開いた状態で、支えるために必要な支持具の寸法を左右それぞれに計ります。計測した寸法をもとに図②のように厚手の中性紙に展開図を描いて切り出し、組み立てると図③のようになります。加工が容易な割に耐久性があることから、中性紙は $700\text{g}/\text{m}^2$ （約 3 mm 厚）のアーカイバルボードを使用することが多いです。

ライトグレーの中性紙はそのまま照明をあてると目立ちます。美しく見えることを意識するならば、展示台と同系色、あるいは黒など目立ちにくい色の紙を貼る、布をかぶせるなどの工夫をすると良いでしょう。

最も単純な形は三角形ですが、展示資料はそれぞれに大きさや形状が異なります。扱う資料の形状に合わせてふさわしい形に加工することが大切です。

展示の際にページが浮く、めくれるなどの問題が起きる場合は、図④のようにアクリルテープをまいて固定をします。この場合、テープは本の大きさ、厚みに合わせて適切な太さに切り、締め付けすぎて資料を傷めないよう注意しましょう。



図④色線がアクリルテープ使用箇所
（アクリルテープは透明、約 1 cm 幅を使用）

多くの洋書は上記の方法で対応できますが、展示資料が非常に大きく重い場合、中性紙の支持具は重量に負けて破損する可能性があるため安全性に欠けます。このような資料はウレタンや発泡スチロールなどの部材を使用した方が重さへの耐久性に優れています。西洋の古書籍には、表紙に金属製の装飾などが施されていることがあります。このような資料を開いて展示する場合も、上記の部材は、装飾が施された箇所をくり抜いて圧迫を避ける加工を施すことができます。

③ 展示環境の整備

展示のために与えられた環境は館によって様々です。直射日光をさえぎり、温湿度調整ができる部屋を用意することが安全な資料展示には必要ですが、閉めきった状態で資料が一定期間置かれるケース内の環境が整っていなければ意味がありません。とくに古い資料は湿度の大きな変化に弱いので、調湿材を入れる、乾燥する季節には水を入れた容器をケースの端に置くなどの処置を施し、できればケース内に温湿度計を入れてこまめに確認をしながら良い環境の維持を心がける必要があります。一般的に、温度は 22 度前後、湿度は 55～59%ほどが理想的とされています。

2. 書物展示の可能性―「難しい」を「面白い」に変えるには？

展示には、それぞれにテーマが設けられています。そこに並ぶ展示品はテーマに基づいて選ばれ、それぞれに館が伝えたいメッセージを担って一つの物語を形成するピースとなります。しかし、伝えるための手段は「美術品」と「歴史資料」では異なります。美術品の展示では、作者や時代背景だけでなく、個々の作品の美しさをいかに強く観客の心に印象付けるかという工夫が必須となります。美しさに対する純粋な感動が、作品背景への興味を喚起する大きな原動力となるからです。歴史資料の展示においても、各資料を美しく魅力的に見せることは大切ですが、それ以上に 1 冊の本からみえる歴史的な出来事や資料が眼前にある意義の発見を楽しみ、「知識」として記憶に留められるようにすることが重要です。展覧会のなかで貴重な洋書が多数並んでいたとしても、その意義が理解できなければ観客には「よく分からないが古びた本があったな」という程度の印象で終えてしまい、さらなる関心へはつながらないでしょう。いかに資料の価値と魅力を伝えるのか、これは書籍などの歴史資料を中心に展示する館としては毎回悩まされる大きな課題です。

以下に、これまで実践した展示における工夫や今後さらに検討すべきであろう課題について挙げます。

① 空間演出の効果

文字資料を中心に展示が構成される場合、展示空間に手をかけて良い雰囲気を作ることは、「難しい」「とっつきくい」という印象を和らげ、展示資料への関心を高める

うえで効果的です。展示室の壁や展示台を黒、白などで統一せず色付きのクロスを用いる、パーテーションを用いて各コーナーを区切り、観客が新鮮な気持ちで鑑賞にのぞめるようにする、などの演出は多くの美術館、博物館で導入されています。これらは実際に効果的ではありますが、コストや展示スペースの広さから実現が難しいという館も多いでしょう。しかし、ライティングの明暗で展示にメリハリをつける、あるいは展示テーマにあったBGMを流す、など簡単な工夫を施すだけでも空間演出としての効果が見込めます。

② 何を、どのように展示するのか～展示資料・場面の選定と見せ方

洋書の場合、多くの来館者は内容を読んで楽しむことはできません。それを補うのが解説です。しかし、文字ばかりが続くと見ている人は次第に疲れ、何が見所で楽しむべき所かをつかむ気力が失われます。展示箇所を選定する際は、挿絵や地図などの図版を織り交ぜ、文字のみの資料は一般的に知られている、あるいは該当箇所を見て楽しめるのかを検討することが、来館者に対し必要な配慮です。また、大量冊数から成る資料は、「数で魅せる」という方法も有効です。文字情報だけでなく、視覚的な情報から1冊の本に興味を持たせ、理解へと誘導する箇所を作ることが資料展示でも求められます。

近年では、デジタルデータの公開が進み、図書館のホームページから所蔵資料の画像が見られるところも少なくありません。このように蓄積された画像データは、展示の現場でも活用できます。書籍展示の難しさの一つに、特定のページしか見られないという問題がありますが、展示室でデジタルと現物の展示を併用することは、資料の全体像を理解する手助けとなります。電子書籍の普及にともない、展示におけるデジタルデータの活用方法は、今後さらに可能性を広げていくでしょう。

③ 資料と人をつなぐ解説

資料展示を楽しむうえで最も重要なポイントは、来館者が資料に親しみ、展示されている意味を理解するための解説だと考えます。個々の解説は150字程の読みやすい長さにおさめ、ポイントとなる資料は別途補足のパネルを作る、など緩急をつけることが大切です。限られた字数で、展示資料の見所を親しみやすい言葉で伝えた解説は、とくに書籍展示においては来館者が資料を自身の心に近付け、知識として取り入れるために重要な役割を果たします。

東洋文庫ミュージアムでは、各解説の頭に資料のポイントを一言であらわすキャッチコピーを設け、なるべく平易な言葉に置き換えて書いています。しかし、文章を簡単にすることに力を注ぎすぎると、大切な部分で曲解をまねく恐れがありますので、バランスには注意が必要です。

また、解説の方向性も個々の資料の性格に応じて分ける必要があります。テーマと

の関連性を示して流れを作るための資料なのか、鑑賞に徹してもらいたいのか、資料としての価値そのものをアピールしたいのか、など展示全体の中での役割に応じて内容を書き分けることも解説には求められます。

以上の事例を元に、講義では画像を交えてさらに詳しくお話ししていきます。

西洋古典資料の修復について

岡本幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は現代の本とは異なる点を多く持っている。印刷に用いられる紙は、麻（主として亜麻）のボロ（古着）を原料にした手漉き紙である。手漉き紙には様々な大きさの紙があり、紙の方向を変えながら折畳むことによって2紙葉のフォリオ判、4紙葉のクォート判、8紙葉のオクタボ判などの折丁が構成される。印刷は活版印刷であり、一冊分のテキストが一度に印刷されることは少ない。多くの場合、印刷の終えた組版をばらして残りのテキストを印刷する。印刷が終わるまでに紙が替わってしまう場合もある。校正や検閲などにより印刷が修正されてページが差し替えられる場合もある。印刷・出版と製本は別々に行われることが普通であって、出版時には製本がされておらず購入者がそれぞれ製本を依頼する。同じ出版物であっても、製本は異なったものになる。したがって西洋古版本は、所蔵の履歴が色濃く形態に反映されている。タイトルが同じでも同一の版とは限らず、同一の版であっても製本などによる形態が異なる。簡略で貧相な製本で、余白を大きく断裁されてしまうこともあれば、華麗で豪華な製本が施され、ページの余白がたっぷりと保持されている場合もある。製本時にメモのための白紙が付け加えられたり、蔵書票が貼付されたり、メモが書き込まれたりすることもある。

印刷された紙葉を本のかたちに仕立てるのは製本である。テキストは製本されて初めて本としての機能を獲得する。西洋古版本の製本は手作業で行われており、作り方も構造も現代のものと異なっている。製本工房に印刷された紙が到着すると、製本職人がページの順番が正しく重なるように折りたたんで折丁を形成する。印刷によって歪んだ紙をハンマーで打って平らにする。テキスト紙葉に見返し用の紙葉を付け加えてから折丁を順番に重ねて「かがり台」を使って綴じる。麻ロープ、麻紐、革紐、羊皮紙テープ、布テープなどの綴じ支持体を用いて、折丁の折り目の内側を丈夫な麻（亜麻）糸で綴じる。背バンド綴じ、支持体かがり綴じ、テープ綴じ、など様々な支持体を用いた綴じ方がある。一運針で2つか3つの折丁を同時に綴じる「抜き綴じ」が頻繁に行われている。綴じが終わると背の丸みを作り表紙ボードの厚みに合わせて背の側に「耳」の突起を形作る。それから表紙ボードに明けた穴に綴じ支持体の末端を通して接続する。紙、羊皮紙、布など

で背貼りをして背を補強し、必要に応じて小口装飾（金付けやマーブル染め、色染めなど）を行う。生成りの糸または色糸を使って「はなぎれ」を編み、表紙革を貼り、見返しを貼る。金箔押し、革モザイクなどで表紙の装飾を行ないタイトル文字を押す。金箔押しの装飾様式には時代によってさまざまな傾向がある。見返しや小口装飾に使われるマーブル染めにも時代的傾向がある。製本時に付け加えられる見返し用紙に「透かし文様」があれば、製本された時代の特定に役立つことがある。このようにして出来上がった本は、現代の本と同じようにはページが開かず、無理に開こうとすると背や綴じ、見返しなどを傷めてしまう場合がある。取扱いの仕方に注意が必要である。

綴じ支持体を使って表紙ボードを固定する製本を「綴じつけ製本」と呼んでいる。「綴じつけ製本」は印刷術発明以降の支配的な製本構造である。ほかに実用的な製本として「リンプ製本」がある。主として羊皮紙を表紙に用いている。18世紀末から「くるみ製本」が使われるようになり、徐々に製本作業が機械化されるようになった。

「綴じつけ製本」で使われている綴じ支持体は、麻（主として大麻）ロープ、麻ひも、鞣し革テープ、トーイング革テープ、羊皮紙テープなどである。表紙ボードに1～3個の穴を開け、綴じ支持体を穴に通して固定する。表紙ボードの接続を背貼りの紙、布、羊皮紙などが補強している。見返しは「綴じ見返し」が多く使われるが「巻き見返し」「貼り見返し」も使われる。綴じ支持体が背に突起を形成するような綴じの場合には、背表紙芯紙を用いずに表装革を貼るので「穴なし」の背になる。綴じ支持体が背に突起を形成しないような綴じの場合に、背貼り素材の上に背表紙芯紙を貼ってから表装革を貼ると「穴なし」の背になる。

「綴じつけ製本」では「穴なし」の背が一般的であるが、時代が下ると「穴あり」の背が作られるようになる。背表紙芯紙を背貼り素材の上に接着せずに表装革を貼ると「穴あり」の背になりホローバック構造になる。「穴なし」の背が経時劣化を経て「穴あり」の背に変化する場合もある。背に塗る接着剤や背貼り素材によって、背が柔軟性を持つ場合もあればまったく柔軟性のない硬い背になる場合もある。本の開き易さに大きな影響を与えている。「綴じつけ製本」では、表紙開閉に伴う負荷が唯一の可動部である表紙ジョイントと見返しノドに集中する傾向があり、結果として表紙の分離を招く場合が多い。

「リンプ製本」は主として16世紀以降に実用的な製本として多く使われた。ほとんどの場合は表装材に羊皮紙を使っているが厚手の手漉き紙が使われる場合もある。表紙ボードを省略する場合と使う場合とがあるが、綴じ支持体及び「はなぎれ」の芯材（主として羊皮紙とトーイング革）を表装材に開けた2個の穴に通して中身と表紙を接続する。背はホローバック構造であり、見返しは「綴じ見返し」または「巻き見返し」構造が使われている。背貼りの紙、布、羊皮紙など

で表紙接続を補強していることが多い。表紙開閉に伴う負荷は、ホローバック構造と綴じ支持体による接続構造によって分散させられている。質素な素材を使った単純な構造の製本は、保存に適した製本として評価されている。

「くるみ製本」は18世紀末に始まったと考えられている。西洋古版本に一般的な製本構造ではないが、出版年代より遅れて製本される場合や、修復時や再製本時に「くるみ製本」に変更される場合がよくある。表紙と中身を別々に作って最後に接着剤で接続する製本構造であるが、初期には「綴じつけ製本」からの過渡的なバリエーションの製本構造もある。過渡期の「ブラデル製本」の場合、背表紙芯紙と平ボール紙が中身の本の上に直接組み立てられている。また初期の手作業のくるみ製本では、表紙は中身と別々に作られるが背表紙芯紙と平ボール紙が繋がった構造になっている。いずれも背表紙と表との間にはミゾが作られる。やがて背表紙芯紙と表紙ボール紙との間にミゾ幅の隙間が作られた表紙構造になる。見返しは「貼り見返し」構造が最も多く、「巻き見返し」「綴じ見返し」構造も使われている。背貼り布または紙が表紙と中味の接続を補強しているが、補強手段が省かれている場合もある。表紙開閉に伴う負荷は、背のホローバック構造と表紙のミゾによって分散される。ただし「貼り見返し」構造の場合には、見返しノドを媒介して見返しを貼りつけたページのノド部分に負荷が転嫁される。見返しに強度のある紙を使ったり見返しノドを無原則に補強すると、見返し自体は負荷に耐えるが見返しを貼りつけたページは負荷に耐え切れずに破断する事例が多く見られる。「くるみ製本」は大量生産に適した製本構造であり、導入後から約100年かけて製本工程のすべてが機械化されて19世紀以降の出版物の一般的な形態になった。当初は麻ひもや布（麻または綿）テープを綴じ支持体として用いてきたが、機械化以降は綴じ支持体が省略された「糸綴じ」になり、現在では糸も省略されて接着剤による綴じに替わっている。表紙ボードと中身の接続を構造的に支えているのは背貼り布（寒冷紗）である。

西洋古典資料は以上のように多様な歴史的特徴を持った資料であり、その特徴を調査して記録し、保存することが大切である。修復作業は機能回復を図る作業と引き換えに現状の変更を伴うものである。修復が資料の保存と利用に不可欠である場合には、資料の歴史的特徴を維持できる仕様で機能を回復するようにする。使用する材料の保存性に配慮し、可逆的な方法と技術で行うようにする。現在起きている破損を繕うだけではなく、破損が生じた原因を探って、今後に同じことが再び起きないような構造的改良を施して資料を安全に使えるようにする努力を追求すべきではないだろうか。手軽な修理を施したことが新たな破損の原因になっている事例を多く見かけるのは残念である。

（資料図版を当日配布します。）

西洋古典資料の目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター)

1. はじめに

この講義では、主に 19 世紀より以前に西洋で出版された古典資料の目録作成について、特に国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録作業の実際に即して、注意点などを考えていきたいと思います。目録作成は、AACR2（英米目録規則第 2 版）における初期刊本に関する規程（2.12-2.18）の拡張規則である Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981（以下 BDRB）と、その邦訳『稀観書の書誌記述』国立、一橋大学社会科学古典資料センター, 1986.（一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11）に基づいて行います。また、BDRB の最新版である Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007(DCRM(B)) の変更点についてもできる限り触れることにします。

2. なぜ特別の目録規則を使用するのか

古典資料でも一般書でも、目録作成において注意すべき点に大きな違いはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただし、古い本の場合には、現代の本との出版事情の違いを意識して書誌作成にあたる必要があります。

一般書と「古典資料」の区分は明確に定まっているわけではありません。区分の方法あるいは基準とする年代は館ごとに異なると思いますが、年代で区分する場合は概ね 18 世紀後半から 19 世紀に基準点を置いて、その前後で扱いを変えるケースが多いようです。この 18 世紀後半から 19 世紀という時代は、出版に関連する技術が大きく変容した時代でもあります。この時代に組版、印刷、製本、製紙など多くの分野で技術革新および機械化が進み、現在と同様に「同一の出版物を大量に生産する」ことが可能になっていきました。

現在われわれが総合目録データベースにおいて採用している所蔵管理の方法は、多数のコピーの同一性を維持することが可能な、現代の出版物の特性を前提に成り立っています。一定の事項（タイトル、出版年、版次...）が一致する出版

物は、一定の同一性を持っているとみなすことができるからこそ、限られた書誌事項のポイントが一致している資料を同一物であるとみなして、一つの書誌の下に管理することが可能なわけです。これに対して、同一物を機械的に大量生産する技術が確立する以前に出版された本の様態は、もっと不安定なものでした。この時代の資料には、タイトル、出版年、版次などの基本的な要素が一致していても、判型や折丁の構成が異なっていたり、差し替え紙葉が含まれていたり、もっと細かい組版上の差異が存在するようなケースが数多く見られます。こうした資料については、極端に言えば同一のものは二つと存在しないという前提に立って、コピー間の差異を明確に認識できる形で緻密に書誌を記述することが必要になります。『稀観書の書誌記述』はそうした詳細な書誌記述を行うのに適した目録規則とすることができます。

『稀観書の書誌記述』では、タイトルや出版者、製作者の記録などについて、古典資料独特の様態に応じて、省略や置き換えをせずにあるがままを記述することが可能です。その他、基本的に AACR2 に準じる内容であることから、目録作成に AACR2 を使用している館であれば、導入が容易な点もメリットのひとつです。ただし、AACR2 と細部で異なる点や、相反する規定もありますので、これに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。講義では、実際の資料を題材に古典資料の目録作成のポイントを確認していきます。

3. 目録作成

ここでは、『稀観書の書誌記述』に基づいて目録を作成する際の注意点を、AACR2の規定と比較しつつ、書誌事項ごとに簡単にまとめておきます。(反転は『稀観書の書誌記述』の規程)

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができる場合が多い
現代の出版物と異なり、古典資料では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、「著者～の…」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。
- ・“I. A. Comenii～”＝「コメニウスの～」のように、著者名が属格で書名に掛かっている場合、文法的に分離できないので、全体をタイトルとして記録する。
- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。
- ・“I / J”、“U / V / W”の転記に注意する。(0H.)
- ・本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- ・責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

- ・タイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付にある責任表示を、そこに表示されている形で責任表示として記録する。責任表示をタイトルページ以外からとった場合は、それを角がっこに入れて、その情報源を注記に示す。(1G1.)

(AACR2 1.1F1. 主情報源以外の情報源から得た責任表示は、角がっこに入れる。)

- ・責任表示がタイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付以外の情報源中にあるとき、または外からの情報源からとった場合は注記エリアにそのことを記録する。(1G2.) →責任表示エリアには記録しない

<ED>

- ・版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)
- ・別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていなくても版表示として記載することができる。(2B2.)
(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報は ED フィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- ・15-16世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されている場合がある。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)
- ・出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実 (先行する必要な語句とともに) によって転記する。(4C2.)
(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)
- ・出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)
(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のものの順で、記録する。...2番目以降は「選択」である。)
- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- ・2つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が2箇所以上があり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・年を示すローマ数字を、それが誤りであったりミスプリントでないかぎりアラビア数字にかえる。(4D1.)

ローマ数字の表記：M=1000, C=100, D=500, I=1, X=10, L=50, V=5

*CD IC C X L=1640

<PHYS>

- ・1800年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。(5D1.) *(8vo)=8折版
- ・印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの(広告、白紙ページなど)で番号づけのない部分は無視する。)

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I / J”、“U / V / W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TTに転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・その著作の書誌的来歴について注記する。(7C7.)

*NOTE : The first of the Elzevir editions of the Janua

- ・色刷りが重要な特質を備えていれば注記する。インキュナブラの色刷りは必ず注記する。(7C10.)

*NOTE: Title in red and black

- ・挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Title vignette (printer's device with motto "Non Solus")

- ・ページ付けの誤りを注記。

*NOTE : Errors in paging: 207 numbered 205 (2nd group)

文献考証と経済思想

— 「ユダヤ人」の歴史をめぐって —

恒木 健太郎

(専修大学経済学部講師)

1. はじめに

「ユダヤ人」と呼ばれた人々の歴史は、バビロン捕囚から始まるディアスポラ（離散）の過程として語られることが多く、その内容はナチスの大量虐殺に象徴される差別と迫害の悲劇を想起させます。一方で「ユダヤ人」は、シェイクスピア『ヴェニスの商人』のシャイロックのごとく、残酷な金持ち商人・高利貸の象徴としてまるで世界の究極の支配者のように描かれることもしばしばです。

このようなユダヤ陰謀説はあとを断ちませんが、その根底には貨幣や商業・金融をユダヤ人と結びつける考えがあります。それはしばしば過去の経済理解をめぐる学問的な議論のなかにも登場します。これらは必ずしも人種主義的な色彩をおびた反ユダヤ主義と直接むすびつくものではありませんでしたが、場合によってはユダヤ人への偏見の源泉にもなりかねないものでした。今回は、そうした問題を経済思想との関係でお話する予定です。

ここでは、いくつかのあまり注目されない古い文献についてご紹介することになります。このような文献をとり扱うのは、過去の歴史研究のために必要だから、という理由のみに還元されないことを、あらかじめ強調しておきたいと思います。現在の通説的な評価をそのまま鵜呑みにするだけでは掘り起こせない、今となっては見えにくくなってしまった事実を発掘すること自体が、私たちの「いま」を問いなおすことにつながるからです。

とくに、排外主義的な言説がはびこる今日の日本において、ユダヤ人差別を問題とすることはきわめて重要なテーマとなります。限られた時間のなかで、私の専門上ドイツと日本のいくつかの思想家たちの一部にしばってしかお話できませんが、本講の内容が過去の文献の保存と公開のもつ現代的意義を伝えるものとなれば幸いです。

以下に梗概を記します。

2. 大塚久雄のユダヤ人批判

私は昨年『「思想」としての大塚史学——戦後啓蒙と日本現代史』（新泉社、2013年）を上梓いたしました。そこで大きくとりあげたのが大塚久雄の「ユダヤ人」観でした。

大塚久雄は、カール・マルクスとマックス・ヴェーバーに立脚しつつ、究極的には生産者のなかに社会を変革する主体性をみいだし、商業・金融は媒介に過ぎないものとみなす歴史観をうちたてました。その内容は「大塚史学」の名でよばれておりまして、地主や財閥のもとで貧困にあえいでいた「勤労民衆」（農民・手工業者や労働者）の主体化をめざす「戦後民主主義」の理念がそこには宿っていた、と理解されています。大塚の議論は、経済史家の立場から訴えかけた実践的な性格をもつ進歩的思想として高く評価されてきました。

しかし、その歴史観は思わぬ影の部分をつくります。それが「ユダヤ人」観です。大塚はその生産優位主義にもとづいて、西洋近代をつくりあげた主体を「中産的生産者層」（おもに農民と職人）であると考え、前近代の経済において商業・金融部門の中枢にあった商業高利貸資本である「前期的資本」と区別します。そして、この前期的資本の性格を「現状寄生的」で保守反動的な暴利をむさぼる営利欲に満ちたものとして捉えたのです。そして、その代表的な主体として「ユダヤ人」を批判したのでした。

今日のグローバル社会において投機的な外国資本に振り回されることを良しとしない観点からみれば、大塚の生産優位主義はある種の説得力をもつようにもみえます。しかし、そこには重大な問題が潜んでいました。大塚は戦時期において前期的資本の権化として「ユダヤ人」を批判しつつ、ナチスの経済政策の合理性を認める立場にたっていたのです。同時期にナチスの行っていたことを考えれば、これを明示した発言が戦後になって問題となるのはあきらかでした。

はたして、大塚はみずからの「ユダヤ人」観にひそむ問題に気づいていたのでしょうか。そして、それにたいしてどのような対応をしたのでしょうか。この点について、本講では前掲拙著をもとに、これまで注目されなかった古い資料の読解から考察していきます。

3. ヴェルナー・ゾンバルトとルーヨ・ブレンターノの商業理解

大塚久雄が生産優位主義的な経済史観をつくりあげていく過程で批判対象としたのが、ルーヨ・ブレンターノとヴェルナー・ゾンバルトでした。二人はドイツの経済思想史において重要な人物であり、戦前の日本にも大きな影響をあたえています。近代資本主義の形成においてユダヤ人の役割の評価めぐり、彼らはぶつかりあっています。ゾンバルトが『ユダヤ人と経済生活』（1911年）のなかでその役割を重視し、ユダヤ人を近代資本主義の精神的起源とまでみなしたのでした。

いし、ブレンターノは史実から反証をあげてこれを否定し、激しく批判しました。

にもかかわらず大塚によれば、両者はともに商業や金融のなかに近代資本主義の形成の主要因をみとめた点で共通している、とされます。たしかに、そのような側面はあります。ゾンバルトがユダヤ人のなかに近代資本主義の起源をみたのは、彼がユダヤ人の商業・金融活動での活躍を重視したからでもありました。また、ブレンターノも近代資本主義の起源を商業の発展のなかにみとめる立場をとっていました。ただし、ブレンターノにとってその起源となるのはギリシアであり、そもそも古来のユダヤ人は農耕していたという事実もあって、ユダヤ教起源説を唱えるゾンバルトには批判的だったのです。

しかし、実際のブレンターノとゾンバルトの議論には、微細にみえて大きく異なる点がありました。それは両者のマルクスの剰余価値論批判のなかに現れています。ここでは、日本では稀観資料に入るとおもわれる、ある雑誌のなかでの両者の「論争」をとりあげます。やや結論めいたことを申しますと、その資料をみるならば、ユダヤ人の歴史にたいする認識においてブレンターノの方が適切であった側面もあるが、商業利潤の捉えかたにおいてはゾンバルトの方が今日的にみても優れた論点を提示していた、という逆説をみることになります。

4. ゾンバルトのユダヤ人観の両義性

ゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』(1911年)は当時のベストセラーでした。そのことは、この本が500頁にもおよぶ大著にもかかわらず9ヶ月だけで6000部も売り上げたこと、またたく間に数多くの書評にめぐまれたことからわかります。ただし、この本を積極的に評価する人物のなかに、反ユダヤ主義的な文書にゾンバルトの言説を流用した人物がいることから明らかなように、本書は反ユダヤ主義に学説的な典拠をあたえた本として悪名高いものでもありました。彼自身がのちにナチスに接近したことも相まって、戦後ながらゾンバルトはヴェーバーと比べて大きな研究対象となってきました。

『ユダヤ人と経済生活』のなかで有名なのが、16世紀以降の経済中心地の変動はユダヤ人の移住にあった、というテーゼです。彼によれば、ユダヤ人が出ていった国・地域は没落し、ユダヤ人が入ってきた国・地域は反映したのだ、とされます。このテーゼを完全なフィクションとみなすことはできない部分がありますが、ユダヤ人の近代資本主義成立への寄与を一面的に強調する記述は、繰りかえし起きるバブルとその崩壊や過度の利潤追求の弊害といった資本主義の負の側面が問題となっていた当時のドイツの経済状況と重なって、反ユダヤ主義に棹さすものとして批判されてきたのでした。

しかし、ゾンバルトの議論はそのような一面的な評価では済まないものでした。近代資本主義がユダヤ人というヨーロッパの「他所者」に非道德的・非合法的手

段を強いながら、それを「隅の首石」として成立・発展してきた側面を、彼は近代的有価証券の成立史の検討をつうじて見抜いていたからです。本講ではこれらのことを、同時代の言説やゾンバルトが典拠とした資料をもとに紹介したいと考えています。